

TEXT

モックンカズロー

DJユニット「タイムスットパーズ」主宰。毎月第2火曜日に催されている「ガーデン」の色物ナイトも好調、週末には大阪の北「エリアガイジン」でもプレイを始めた。

木屋町ズビズ・バー学 (総集編)



1. はじめに

なんでも本誌の特集が酒らしく、いきなり編集部の方から「コラムのネタも酒にして下さい」という強引な依頼があったので、迷わず酒の話にすることにしました。折しも京阪神エルマガジンの「ミーツ・リージュナル」とリクルートの「じやらん」でも同じ類の取材を終えたところだったので、ものぐさな作者は総集編という言葉にかこつけて、木屋町ズビズBAR学なるものを敢行するという訳である。ズビズBARとは、一昔前のイキッてスカして講釈たれて飲む酒場のことではなく、ジモテイで、ファミリィでアツパいで、ティープで少々ハメを外してもハイブローに飲める酒場のことであり、ズブズブという言葉が私に左と全の

歌に因んで生み出した新用語である。ご容赦いただきたい。

2. ズビズ・BARのカテゴリー

何故、木屋町がズビズ・バーなのかという点については、無論そこに身を呈して飲んでいる人間でないと理解しがたいことなので、ここではあえてズビズ・バーとは何かといった説明を加えておくことにしよう。

① 千円札一枚しか財布の中にはないというのに、「一杯だけ飲んで帰ろう」と思ってしまう、キャッシュ・オンの店であること。

② 店のハードに小賢しく金をかけていないこと。

③ アバウトでハイブロー、お調子のりで祭り好きだが、意外に律義でお人好し

といったキャラのオーナーが多い。(ワイルドでジャンキーなオーナーがわがままに店を経営しているところもあるが、私のカテゴリーの中では、あくまでファミリィで平和主義な店ではなくてはならない。)

④ 音楽的主張がある。

⑤ 同業店間、常連客間のフレンドリーシップが作れている。またその情報網が行き届いている。

⑥ クラブDJ、アーティスト、媒体関係などの所謂クリエイティブな業界人が結構出入りしている。

⑦ 遊び人は多いがヤンキーやチンピラーは居ない。

⑧ 酒の勢いに任せて気負わずナンバが、いや異性にアクセスがでる環境にある。

3. 壹万円ゲームというハシゴ

正に清貧の時代にふさわしい明朗会計なナイトスポットが群雄割拠する木屋町は、とにかく一処に腰を据えるのが似合わない町である。木屋町の御池あたりから、四条ぐらゐまでをずーと下っていく間に、一体壹万円で何軒ハシゴができるかを仲間と競い合ってみてはどうだろうか。全部回るとしてもじゃないけど予算通りにはいかないが、私のいつものコースをほんの一例として記しておくので、参考にもしてくれれば幸いだ。

まずは、エンバイアビルの「テディーズ」からまいります。ここではテディの鼻の穴が開いた写真を見ながら、テキーラ入りのコロナ(1600円)を景気づけにあり、同じフロアの「クック・ア・フープ」でタコさんと上野宏介氏の近況報告を語り合ってみよう。ラムを一杯(1600円)、居ないと分かって「大江くん居るう」とかいながら、これまた同じフロアの「キング・コーク」の扉を開け、ニホちゃんにテキーラ(マリアッチ・ゴールド800円)を注文する。といった具合にこのビルを回遊するのがよろしいようで。ビルを降りると今度は、はず向いに見える高瀬川のもとの「フラミンゴ・カフェ」でノブちゃんのウォークマン声「ぜんぜん大じょうぶやしー」を幾度となく耳にしながらシャリー・テンブル(900円)をいただく。映画「ブレッド・ランナー」に出てくるレプリカント、プリス

に似たり力ちゃんが来てないと判ると、面白くないので店を出る。その一本南の通りにある、「よしみ」で簡単に腹ごしらえをする。「フィッシュ&チップス」「バツクギヤモン」と行きたいところだが、なんとなく30過ぎたブチオッサンの私が、キッズに囲まれて酒を飲むのは気が退けるんで、三条通りを渡ってツジタビル2Fにある「ピカ・バー」に足を向ける。ドリーにスロージン(8000円、そうそうここは食べ放題の落花生がチャームに付いてくるんでチャージを200円だけ取られることを覚えておこうネ。)を頼んで落花生を床に「落せせい」と言わんばかりに落とせば、シルベルトのボサノバにハマるにはまだ時間が早すぎること気づいて、次の店、三条テラスビルは3F「アルコール・ボンバーズ」へ向かう。元チャイナのスタッフ、シバヤんと、バーコや本誌のコラムニスト丸岡泉穂の話に花を咲かせながら、エズラ(8000円)を1ショット。少しばかり酒が回ってきたのだから、いい心持ちで六角ビルB1Fの「ソー・ワット」の扉を開けると、イウォーク族の未喬、西垣のヨーちゃんがアツパルトン・ダーク(8000円)を薦めてくれる。ここまでは来る何故かテリーの笑顔が恋しくなるから不思議だ。迷わず「アツパス」にコマを進めて、エビスの生(8000円)で酔い醒し。「ピカ・バー」「ソー・ワット」「アツパス」ときてこのグループの代表、ススムさんの顔が見えないのも何だか物足りない気分。しかしそんな夜もある。6^{1/2}通称ロクハンのライさんのブルースを聴くの忘れてた、いやあ、あそこは夜が明ける頃に行くでしょうと自分で妙な納得をしながら、エリック・クラブトンを聴きに行こうと心に決め「ストレンジ・ブルー」に押し入る。デイスコ稼業の長かったクロさんも、ついに一城の主かと感心しながらタッド

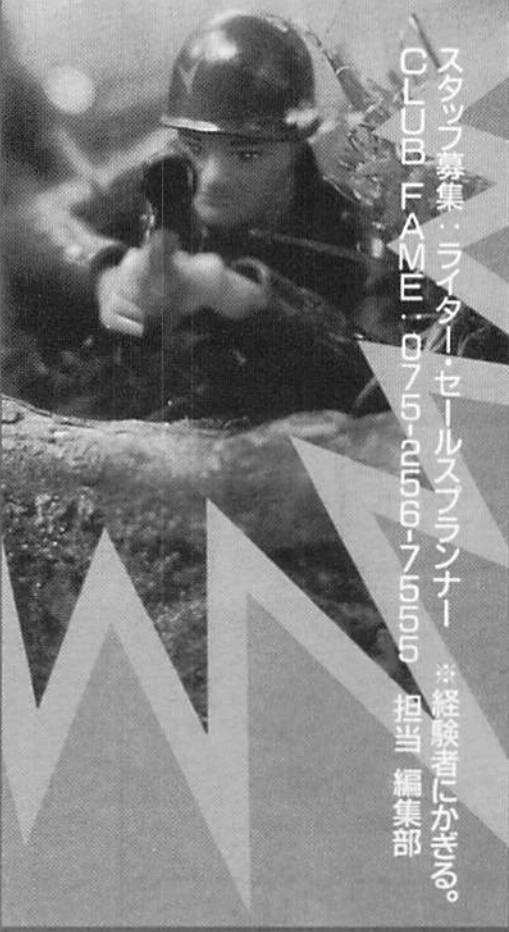
即戦力

スクランブルノスクランブルノ

力のあるライター

腕におぼえのあるライター

この指令を受け次第、速やかに行動せよ。



スタッフ募集・ライター・セールスプランナー
CLUB FAME: 075-25667555

※経験者にかぎる。
担当 編集部

(700円)を嗜んでいると、アーティストの迷ディレクター、カモちゃんか昔とつた柁つかロックのクダを巻きにやつて来る。話題を変えようと彼を引きつれ、同級生のカク(格谷くん)がやってくる。スウィング・トップへ移動。カクの「マハラジャ祇園・ギャル談義」に耳を傾けながら時が過ぎる。「オーチヨリオス」そしてなかなか名前が覚えられずにモンチャックとかヤンチャックとか呼んでしまう少年ことラクダ顔のイトウちゃんがか切盛している「チャンティック」と同じ新大佳会館内をさまざざしていたら、お腹が減ってきたので真横にある「屋台ゴジラ」へゴジラうどんやゴジラ焼きを食へに出る。(このあたりのシズル感たつぷりの様子やハードテータは多分、今月の特集頁に載っていると思うんでここでは割愛しておくとする。)お後は、「フラワー」を横目にして「ステッパ乱歩」のキタさんとこでマリアッチ(6000円、たまに5000円の時もある。)に溺れる

といった具合だ。酔った勢いでロイヤルビルの屋上にかけ登り、そこから見降ろす夜景はほんに「ブレッド・ランナー」お試しあれだ。余裕があれば、木屋町蛸薬師角の香港的路地内、木屋町会館1Fにある「ビートルズ・ビートルズ」のマスター、テツちゃんの、納豆のようなビートルズ論を聞きに行き「夢や」で夜明けのめしを食べたい。ここまでに登場した店、締めて20件。どーだ、ハングオーバーしそつだらう。

4、オレオレゲームという魔力

ハロウィンでもないのに顔中スミだらけの奇々怪々メイクで彷徨する連中を、この木屋町で見かけたことがないだらうか。これこそ今、最もホットな乱痴気騒「オレオレゲーム」である。誰か命名したのか知らないが、どうも巷のサッカーチームの影響が大らしく、サポーターに見立てて顔にペインティングを施すことからこの名が付いたようだ。人間、誰しも変身願望があるようで、化粧をしたり面を被ったりする行為で真の自分の姿を内親したり、他のもう一人の自分を発見したりすることがそもそも大好きな生き物なのだ。酒が入ればなおさらのことである。ズビス・バーでの遊びの達人としてすっかりインシアチヴが取れるように、まずはルールを把握しておこう。遊び方は至って簡単、まずはお店のスタッフに一本のゴルフ球を用意してもらおう。見当たらない場合は、ワインかシャンパン、またはエスラのようなゴルフ付ボトルを下ろしても手に入れる。それでもない場合は最寄りの酒屋、マルヤマかオクダ酒店まで買い出しに行く。と、ネタの仕込みができれば、後はほとんど黒けになるまで炙り、炭状になったのを確認したら一緒に飲んでるツレや店のスタッフを並べて、彼らの顔に落書きをすればよい。マヌケツラの品評会は盛り上がることも間違いなしだ。メイクのツボは、

モデルになる人間のキャラクターが十分に活かせる役作りをすること。目ん玉つながらりのおまわりさんやドラエもん、ゴルゴ13や、タイガー・マスクがトニー田中バリーに描ければ、もうあなたはこの画面をクリアしたと言つてもよい。見知らぬ客をも誘い込み、店が一つになる夜は至福の喜びだぞ。そのままバー・ホッピングへ繰り出そう。余談だが「ギルガメ」のゴウちゃんのルパン三世、「フラミンゴ・カフエ」のノブちゃん演じるデビルマン、「アップス」のテリーちゃんハマリ役のゴルゴ13はアカデミー賞ものだ。是非とも発表してもらおう。絶対メイクがいやとこねる輩には新一気コール、「ウイ・アー・ザ・チャンプ」の替え歌、「フーメーノ・メノ・メノ、〇×ちゃん(こはターゲットになった奴の名前を入れ込む)〇×ちゃん」と皆で合唱しやり込めるとしよう。

5、ジョン・ロビンソンごっこ

ズビス・バーといえども、妙に静かな夜や、いきなり襲ってくる沈黙など予期せぬ空気が訪れることがある。そんな時はためらうことなく「いきなりジュリアナ・ナウイトー」とジョン・ロビンソン節で叫び、店に居る客全員を巻き込んで2人アンリミットッドの「トワイライト・ゾーン」を唄い出すのがいい。スタッフや常連客をお立ち台に見立てた椅子や机に上らせ「バラツバラツバラツバラ、バラツバラツバラツバラ、バラツバラツバラツバラ、バラツバラツバラ、ヒューー」といったあんばいだ。「ヒューー」の掛声がキレイに揃うまで何回でもリフレインしよう。メニューを扇子代わりにすることも忘れずにね。

ただ今、木屋町ジモテイ、ズビス・バーファミリーのメンバー募集。町で私を見つけたら、気楽に声をかけて下さい。